



足しましたので、具体的なテーマで実現性を探る必要がありますね。澤井 例えば、雪は商人にも生活者にも邪魔物ですが、雪を有効利用する技術が開発されてきています。雪を夏場の冷却用に利用できれば、留萌には港があるので、保冷庫などに活用できると思います。

サハリンの油田開発でも海底パイプラインで石油天然ガスを日本に運ぶ時、留萌沖から日本国内に入るという絵もありますし、21世紀の留萌にとっては、発展の可能性を秘めていると思います。

市長 とにかく、情報のアンテナを広げて、情報収集できる体制を作る必要があります。

留萌の産業構造は水産加工と建設業が中心ですが、これからはもっと柱を増やしていかなければなりません。

澤井 情報の収集・発信という面では、商工会議所青年部、開運町商店街が昨年インターネットのホームページを立ち上げました。

また、個店の紹介程度ですが、新たなメディアを商工業に生かすきっかけ作りを始めてみたくです。他の有名なバーチャル・モール（インターネット上の通信販売）では、月に4億円の売上というところもありました。

留萌にも特産品は数多くあるわけですから、可能性は充分あるはずですが。

消費性向がここ数年でガラッと変わってしまい、お金を使っているのに、モノが売れなくなりまして。

つまり、消費者は、携帯電話など電波の通信料にお金を使うようになったんです。

こういった消費の変化は、全国一斉に起こっていますから、ビジネスチャンスは同時に、どこにでもある時代になったということですね。

富田 インターネットの世界では、「渋谷パレール」といわれ、ソフト開発の企業が密集しています。

それが留萌でもいいはずですが。砂漠でもできるんですから。発想ひとつで、何億というビジネスの可能性はいくらでもあると思います。



中心市街地活性化とまちづくり

市長 中心市街地活性化の取り組みが始まっていますが、都市計画マスタープラン（将来の具体的なまちの姿を計画する）の策定とも合わせて、コンパクトなまちづくりと留萌らしさをいかに演出するかがポイントだと思います。

その点で、「朝」はうまくいきませんでしたね。女性の感覚がさがされたいですね。

安達 繊細な感覚の持ち主が多くて、斬新なデザインで内装ができましたね。

市長 お金をかけずに、アイデアで勝負した例ですね。まちのデザインも同じことが言えます。中心市街地の整備では、まち並み景観にも配慮したいですね。

安達 全部同じじゃなく、統一的なコンセプトが一部にあればいい

でしたから、行政も含めて、どんな知恵を出し合いたいですね。

2000年に向けて

市長 最後に、みなさんは今年1年をどんな年にしたいですか。

梅田 中心市街地活性化では、女性の感覚、ソフトな部分を取り入れたいですね。

21世紀に住みよい、留萌のまちづくりができるように頑張りたいと思います。

富田 今年は「終の住みか」ですね。今を見つめ直し、21世紀に向けて、自分たち、次世代の子供たちが安住できるまちを作ろうと思っています。

例えば、「子供たちに夢を」ということで、若松監督の野球教室・野球大会、未来への手紙や絵を書いてタイムカプセルを埋めるとか、コンピュータで3次元の未来の想

像図を留萌、小平、増毛までの広域的なゾーニングで描きたいと考えています。また、お父さんが青年会議所で勉強する姿を子供たちに見てもらおう「お父さんの参観日」などを考えています。

閉鎖性、灰色的なイメージを払拭して、新しい色付けをする年にしたいですね。

村山 今年はまず「2000年だ！ 朝っこ春待里」を、昨年と同じ内容で無理なく、ただ、外部からの出店を生かしたものにしたいと思っています。

他の女性が「あの人にできるのなら、わたしにも」と思えるようになればいいですね。「お手伝い」から「いっしょに創り上げる」という意識へ変えることですね。

澤井 今年のキーワードは「連携」でしょうか。若い人と高齢者、男性と女性、いろいろな連携でアイデアを出して実行したいですね。

と思うんです。市長 伊達の商店街が、白い壁と瓦屋根の2点でイメージを変えました。要は、留萌の特徴を生かす工夫ですが、「商人塾」ではそういうことがテーマになりませんが。澤井 留萌の商店街は、これまで個々の商店街単位で、という考え方が強かったと思います。

でも、連合会青年部の「商人塾」が発足したことで、個々の商店街の力を取り払い、広い視野で考える土壌が生まれてきました。

梅田 今まではハードの議論が多くて、ソフトの議論が出てきたのは最近です。中心市街地活性化では、副港の利用もそのひとつです。

安達 副港から福祉センターの辺りは、幼稚園のそばに老人ホームがあつて欲しい。お年寄りと子供の交流が生まれまますし、さらに、若者のサークルの活動拠点が近くにあれば、子供からお年寄りまで全ての年代が関われるゾーンになります。

澤井 どの世代の人にも住みやすいまちづくりですね。

でも、まとまったものを作るには、現実的には土地が必要で、市所有の土地、小公園などを交換して、一か所に集めることができないかと思うのですが。

青年部はそもそも異業種の集まりですから、新規産業の創造について話し合い、自分の役割を明確にして、ソフト事業の充実に一歩ずつ取り組める年になればいいですね。

安達 昨年S.Lや「朝」に関わって「留萌ってすばらしい」と思いました。留萌には、海と山があり、食べ物もいい。

「けんぞんは美德」と言われますが、もっと堂々とアピールすべきです。そして若い人に集まってもらいたいですね。最後に「若い人がいっばいいいね」と言えるように。

市長 今年は、留萌全体の課題としては、まず不況からの脱出と地場産業の振興。そして、とにかく人づくり。

市民一人ひとりの意識と取り組み方で、結果は大きく変わるはずなんです。

さらに、フェリー就航などで道北の人と物の流れの拠点を留萌に作り出し、その波及効果で次のチャンスを作っていく。

港、さかな、水産加工など留萌の魅力を生かせるように今年も頑張りたいと思っています。みなさんの今年一年の活躍を心から期待しています。全員 はい。頑張ります！



まちづくりは、人づくりからですから、みんなが共通概念を持つことが必要です。

これまで、ソフト事業について企業同士が話す機会がありません

